

おはようございます。2月、3月はあっという間に月日が過ぎ、気がつくとも今年度最後の登校日となりました。今日は、3月1日に行われた卒業式の話から始めます。

昨年も少しお話ししましたが、1年生は初めて聞くと思いますので、初めに本校の卒業式について説明します。

中学校の卒業式では、壇上で一人ひとりが卒業証書を手渡され、合唱曲を2、3曲歌うという形が一般的かと思います。高校の場合、規模の小さな学校では校長が一人ひとりに授与しますが、大きな学校では、本校もそうですが、総代と言ってクラス代表が受け取る方式が多くなります。

私はどちらも経験していますが、本校のような総代方式が良いと考えています。というのは、証書は最後のホームルームで、担任の先生から一言添えて手渡される形が良いと思うからです。

本校では、卒業証書授与の後、普通科3コースと特進科それぞれの成績優秀者1名に対して学業優秀賞を授与します。その後、校長式辞、来賓祝辞、在校生代表による送辞、卒業生代表による答辞と続きます。

在校生代表は、2年生の生徒会長が務めることになっています。一方、答辞については、3年間よく精進し、人物・学業ともに優秀な生徒を選考しています。しばらく男子が続いていましたが、今年は女子でした。

大石田から通った生徒で、答辞には3年間の歩みが凝縮され、とても感動的なものでした。もともとは保育に関心があって本校に入学したそうですが、学びを重ねるうちに、小学校の先生になりたいという思いへと変わったそうです。

高校で得た知識や経験を通して視野が広がり、自分の進路を見つめ直し、時には修正していく。それこそが高校3年間の学びの本質だろうと考えます。

卒業式が終わった後、保護者の方々から、卒業式や3年間の振り返りの感想をいただきました。その中から2つを紹介します。

○高校の卒業式で泣けるシーンはあるのかなと思って参加しましたが、校長先生の式辞、卒業生代表の答辞、卒業生から保護者への感謝の言葉で泣き、ホームルームでもたくさん泣かせていただきました。親に感謝する気持ちを教えていただきありがとうございました。この高校に入ってよかったと子供も親も思っています。先生方、本当にありがとうございました。

○本校への入学は、公立高校受験に失敗した結果でした。それは城北での新たな意味探しの始まりでした。小幅ではありますが、腐ることなくひとつひとつを大切に日々過ごしてきたように映ります。部活動は、自身を表現できるダンス部に入り、最後まで続けられたことは頼もしく思えます。そして、日韓交流に参加できたことは何より特別な思い出です。交流団の代表として正義女子高で挨拶させていただいた体験は、自信となり大学進学への力になりました。韓国の学生を自宅に招いたことも家族にとっては宝です。たった一日だけでしたが、異国の女子学生とココロを通わせられたあたたかく微笑ましい時間でした。大変ありがとうございました。こうして過ぎてみると、たくさんの意味を拾うことができた3年間でした。

私は式辞の中で、今年の初セリで大間のマグロを5億円で落札した、すしざんまいの木村社長さんの歩みを紹介しました。そして最後に、次のような言葉で結びました。

「皆さんの今日という日を、天国から静かに見守っている人もいるでしょう。直接『おめでとう』『ありがとう』と言葉を交わせなくても、これまで無言で背中を押し続けてくれたその人へ、心の中でそっと感謝を届けてください。」

皆さんの中にもいるかもしれませんが、卒業生の中にも、高校に入学してから家族を亡くした人がいます。実際、ある生徒は2年生のときに母親を病気で亡くしました。その後、さまざまな出来事が重なり、教室に入ることが難しくなりました。

その生徒は、生前のお母さんと「高校は必ず卒業するから」と約束していたそうです。どんなことがあっても、その約束だけは守りたい——その一心で努力を続けました。

そして、卒業証書は体育館ではなく別の場所で、私が直接手渡すことになりました。教室に入ると、机の上にはお母さんの遺影がそっと置かれていました。

私は体育館で読んだ式辞を、そのまま読もうとしたのですが、最後の「天国」という言葉に差しかったとき、突然涙があふれ、どうしても声が続きませんでした。

彼女自身も涙を流していました。けれど、その表情にはどこか晴れやかなものが浮かんでいました。お母さんとの約束を、確かに果たしたという誇りのようなものを感じました。

数日後、その日のことを思い返しながら、ふとこんなことを考えました。仕事の中で涙を流す職業というのは、教員のほかにどれくらいあるのだろうか、と。

医師は患者を看取ったときに涙を流すのだろうか。

弁護士は裁判に敗れたときに涙を流すのだろうか。

銀行員は、公務員は、スーパーの販売員は——。

そう考えていくと、教員という職業は、特別な仕事なんだということに気づかされます。卒業式に限らず、最後の大会などで顧問の先生が涙を流す場面を見たことがあるでしょう。

それはきっと、生徒たちとともに歩んできた日々を、一つひとつ思い起こすからなのかもしれません。うまくいかず悩んだ日もあった。励まし、励まされながら前に進んだ日もあった。努力が実り喜び合った瞬間もあった。そうした時間を、すぐそばで見守りながら、ともに過ごしてきたからこそ、最後の瞬間にさまざまな思いが胸に込み上げてくるのかもしれません。

人の成長に寄り添い、その歩みを間近で見届けられることができる——それが、教師という仕事の大きな喜びです。先生たちは、皆さんの成長を、誰よりも近くで喜んでいる存在なのです。

そして、学校にはもう一つ大切な存在があります。

同じ教室で学び、笑い合い、時には励まし合っている友人です。人は、自分の力だけで何かを成し遂げられるほど強い存在ではありません。仲間の姿に勇気をもらい、誰かの言葉に励まされ、時には傷つきながらも、そうした経験を重ねる中で成長していくのです。そして、それが全日制の高校で学ぶ意義でもあります。

今日の修了式は、一つの学年を終える節目です。この一年を振り返りながら、ここまで歩んでくることができたのは、自分一人の力だけではないということに、ぜひ思いを向けてみてください。

私の卒業式式辞は、ホームページの「その他のお知らせ」で読むことができます。ぜひ春休み中に目を通してください。

それでは、充実した毎日を過ごし、4月7日の始業式の日、元気な姿で会いましょう。